

## 留学先：ハンブルク大学

氏名：片川絵里奈（留学時：教育地域学部学校教育課程 4年）

留学期間：2016年10月～2017年9月（11ヶ月）



交換留学を希望した動機	<p>サマースクールで初めてハンブルクを訪れた際、一つの街にいながらも他の国々とのつながりを感じることでできる街の雰囲気、憧れを抱きました。日本に帰ってからも、もう一度あの街へ行き多文化共生の在り方を学びたい、という思いがありました。また、大学入学当初からドイツの文化・価値観にもっと触れたい、という思いもあり、留学を決意しました。</p>
留学先を決めた経緯	<p>理由は主に三つあります。一つは、ハンブルクはヨーロッパの中でも移民背景を持つ人が多い街であるため、さまざまな価値観に触れることができるのではないかと考えたからです。</p> <p>二つ目は、留学先の大学に日本学科があったからです。日本で在日外国人の子どもたちの支援に携わっていたこともあり、日本語教育に興味があった私は、実際に日本語教育の現場を見て、自分にも学べる可能性があるのではないかと考えました。</p> <p>三つ目は、安全な場所だと感じたからです。留学を決めた当時は、ヨーロッパでテロが起こっていたことが不安要素としてありました。ですが福井大学で知り合った、ドイツからの交換留学生と交流があったため、現地の様子を聞くことができました。もしもの時に、頼れる友人がいる環境だということは大きな決め手でした。</p>
留学先の大学について (特徴や紹介したい特色)	<p>ハンブルク大学の特徴の一つは、日本語学科があることです。ドイツで最も古く、日本の言語、文化、歴史に興味のある学生が多くいます。彼らと同じ授業に参加していると、自分の知らない日本の一面に気づかされることがあります。またタンデムなどで、互いの母国語を教えあうことができるのも魅力です。</p> <p>二つ目の特徴としては、ドイツ以外の国からの学生も多いたことが挙げられます。参加していたドイツ語コースでも、ヨーロッパはポーランド、イタリア、フランス、スイス、フィンランドなど、そしてアジアからの学生も多かったです。様々なルーツを持つ学生たちと互いの意見や考えを伝え合うことで、彼ら</p>

	<p>の文化を垣間見ることができます。また授業外でも、ハンブルク内の大学が共同で運営しているスポーツクラブに参加することで、他大学の人との繋がることのできるのも特徴です。</p>
<p>留学先で履修した科目や学習等</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>➤ 日本語学科の授業 <ul style="list-style-type: none"> <li>・「独文和訳」</li> <li>・「日本語会話」(サポーター)</li> <li>・「漢字」(サポーター)</li> <li>・「字幕翻訳」(サポーター)</li> <li>・「多文化理解」</li> </ul> </li>   <li>➤ 語学コース(DaF)の授業 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <b>Schreiben und Wortschatz</b> 「語彙と作文」</li> <li>・ <b>Sprache für das Studium</b> 「大学でのドイツ語会話」</li> <li>・ <b>Phonetik</b> 「音声学」</li> <li>・ <b>Kultur und Sprache aus interkultureller Sicht</b> 「異文化の視点から観る文化と言語」</li> <li>・ <b>Deutschlernen mit Kurzfilmen</b> 「短編映画で学ぶドイツ語」</li> <li>・ <b>Lesestrategien für den Uni-Alltag</b> 「読解ストラテジー」</li> </ul> </li> </ul>
<p>あなたの留学先へ交換留学を考える福井大学生へのメッセージ</p>	<p>私は留学当初、挨拶と自己紹介、それに日常生活は困らない程度のドイツ語しか話せませんでした。いざというときには英語に頼ろう、という思いがあったからです。しかし実際にドイツへ行ってみると、確かに英語も通じますが、やはりその国の言葉で話すことができれば現地の人との距離がグッと縮まることを感じました。留学を考えている方は、日本にいる間から、タンドムパートナーを見つけて、少しでもドイツ語での会話に慣れておくことをお勧めします。</p> <p>ハンブルクは大きな都市ですが、緑が多く、川や湖もあるおかげでゆったりとした時間を過ごすことができます。またヨーロッパの中心に位置しておりアクセスもいいので、気軽に他の国に足を運ぶこともできます。気候的には冬は驚くほど寒い時期もありましたが、それを乗り越えれば、春には草花の芽吹き、夏から秋にかけては日が長く快適な日々が待っています。ぜひ、一年を通してのハンブルクの魅力を味わってほしいです。</p>

## 【交換留学の成果について】

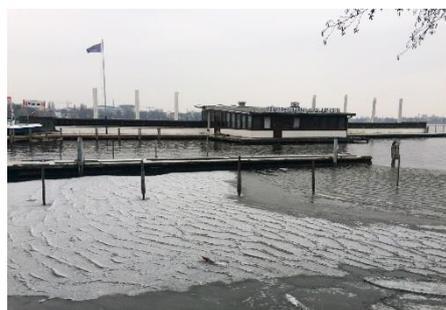
私がハンブルク大学への交換留学を決意したきっかけは、2年次に参加したサマースクールでした。当時は、生活のなかでさまざまな背景を持つ人に出会うことができ、一つの街にいながらこんなにも世界とのつながりを感じられるのか、と感銘を受けました。それ以来、もう一度あの街へ行き多文化共生の在り方を学びたい、という思いを抱いていました。



当時、寮での日本食パーティの様子

交換留学が決まってからは、ドイツの文化や教育、社会情勢に関する記事や本にもよく目を通しました。そのことを通して、私はグリム童話や伝説などのドイツ文学や、ドイツ社会における環境への意識や移民教育などにも関心を抱くようになります。そして「自分の目で見、肌で感じて学ぶ。」「中級レベルのドイツ語を身につける。」という目標を胸に、ハンブルクへ飛び立ちました。

ハンブルクでの生活に慣れるまでの約3ヶ月間は、毎日のように新しい出来事が起こり、新たな出会いも多く、日々の充実感から、時間が飛ぶように過ぎ去りました。ですが時には、自分のドイツ語運用能力の低さを実感したり、「アジア人」「日本人」のレッテルを貼られることに対するわだかまりを消化できずいたり、といったことが原因で落ち込んだこともありました。そんな時、自分が立てた留学の目標、現地での学習をサポートしてくれるタンデムパートナーをはじめとする仲間、そして自分の将来の目標のことを思い、それを支えにしていました。



よく散歩したアルスター湖



多くの時間を過ごした AAI

(アジア・アフリカ研究所)

ドイツ語能力の伸びを感じ始めると同時に自信が沸き、再び日々の充実感を覚え始めたのは、留学開始から半年が過ぎた頃でした。それまでのタンデムやドイツ語の授業での会話では、知らない語彙の意味を想像しながら、相手の話すスピードについていくのが精一杯で、なかなか自分の思うように会話することができませんでした。ですが、相手に聞き返したり、話すスピードを落としてもらったりせずとも、相手の発言の意味が大体とれるようになり、相手への相槌やコメントも、自然な流れで返すことができるようになってきました。それに伴い、自分の興味のある文学や教育の分野についてドイツ語で意見交換ができるようになった上に、図書館で見つけた文献を読み、情報を得ることもできるようになり、「ドイツ語を学ぶ」から、「ドイツ語で学ぶ」というように変化していったのを実感しました。

ドイツ語以外の学びも多くありました。その一つが、日本語学科の学生との交流から、自らの文化に対する考え方に影響を受けたことです。日本語学科の学生は、日本の文化や歴史、政治や文学など、興味がある分野についてとても詳しいです。彼らと会話するなかで、「日本人なのに日本について知らない自分」の存在に気づかされるのがよくあります。そのような経験から、「私も日本人として、自国の文化や歴史についてもっと知りたい・知るべきだ。」と思うようになりました。特に第二次世界大戦についての意見を求められたときに、そう思いました。日本では戦争について話すことはあまりなく、むしろ避けられることも多いように感じますが、ドイツではそうではありませんでした。私はそのテーマについて聞かれたとき、何を語ればよいのかわからず、話題をそらしてしまいました。私には広島出身の祖母と長崎出身の祖父がいて、戦争のことについて自分も少しは理解できているつもりでいた分、何も言えなかったことがずっと心残りになっています。まずは「自分に身近なところから、歴史や文化について知り、考えていく。」ことを、これから取り組んでいきたいです。

そして何より、「多文化共生の在り方」を、大学での学び、日々の生活から感じ取ることができたのはこの留学での大きな実りでした。多文化共生において不可欠なもの、それは「自らが選択できる能力と環境」だと思います。そう考えるようになったきっかけは、大学の授業でハンブルクの学生と「学校教育」「若者の政治参加」「移民・外国人問題」という3つの社会問題について、ディスカッションしたことでした。ドイツでは学校教育で、「自分で判断すること」を身につけることに力を入れています。政治教育に関しても、すべての政党の特徴を知った上で、その中から自分の考えに最も合った党を選ぶことができるように、授業で学ぶそうです。そのように、人の考えの基礎を形成する場において、「自ら選択・判断できる力」が重視されている分、学校教育においてのみならず、社会に出てからも、個人が生き方を選択できる場面があります。例えば、移民としてドイツにやってきた人でも、ドイツに5年以上住み、一定のドイツ語の基準をクリアし、ドイツの歴史や文化に関するテストに合格すれば「ドイツ人」として認められ、永住権を獲得できる仕組みがあります。このような、教育の理念から社会システムまでが一体となって、「多文化共生」を成り立たせているということがわかったとき、自分がドイツ社会のさまざまな面に惹かれてきた理由に納得できただけでなく、自分がどんなレッテルを貼られようと、「自分の在り方は自分で決めることができるのだ。」と思えるようになり、気持ちが楽になりました。

学問以外にも、日常生活のなかでさまざまな体験ができました。私にとって、初めて親元を離れて生活をしたのがこのハンブルク留学です。生活面でも、精神面でも家族に頼っていた日本での生活とは大違いでした。

まだ寮生活に慣れていない時期に、日本でも経験してないトラブルが発生したこともありました。そのような時、「何事も勉強だ！」と思い、他人の助けを借りながらも解決に導くことができたのは、留学を通して人間的に成長したいという思いがあったからかもしれません。また、ピンチに陥って必要に迫られると、ためらうことなくドイツ語を話すことができる、ということに気づきました。そして、自分のつたないドイツ語でもコミュニケーションがとれたことが自信につながっていったため、今振り返れば数ある失敗も、よい経験でした。

11ヶ月の留学生生活を終え日本に帰ってきた私は今、慣れ親しんだ日本での生活に、前より少し有り難味を感じているところです。また同時に、もう一度ハンブルクへ行って、今度は社会人として生活してみたい、と考えています。留学中に「ドイツ日本語教師の集い」に参加し現場の声が聞けたこともあって、ドイツで日本語教師として働くことへ関心を持ったからです。また、これまで教育課程で学んだことと、自分のドイツ語能力を活かしてみたいからです。

いきなり現地で就職することは難しいかもしれませんが、ワーキングホリデーの活用も視野にいれつつ、もう一度あの地で自分を試すことを、今後の新たな目標にします。それを実現するためにも、この留学で学んだことを糧に、ドイツ語運用能力を高め、専門性を身につけることに力を入れたいです。